入口施設を有する小竪穴（芳賀輪遺跡第12号土壙）について

―鹿島川中流域の縄文時代の遺跡の研究（４）―

田　中　英　世

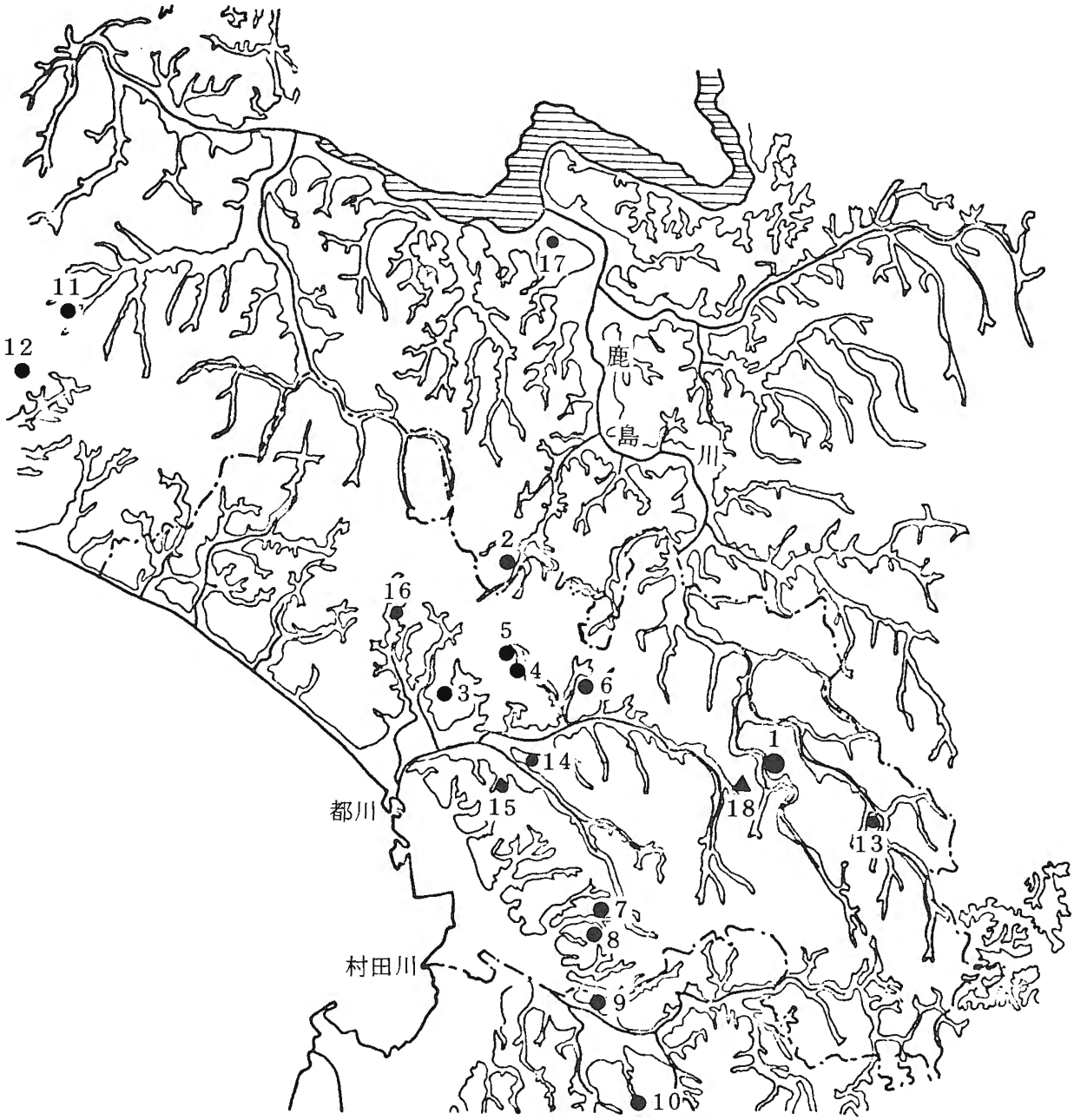
はじめに

芳賀輪遺跡は鹿島川中流域に位置する縄文時代中期を中心とする大型集落遺跡であり、その概略については既に公表された報告書に詳しく述べられているが、その特徴の一つとして底面に「子ピット」と呼称される小ピットを有する小竪穴群の存在が掲げられる。今回紹介する第12号土壙は第４次発掘調査により検出されたもので、ローム造り出しによる入口施設を有し、小竪穴の機能を考える上で極めて重要なものであり、あわせて小竪穴を中心とした鹿島川中流域の縄文時代中期の遺跡の在り方をみていきたい。

1.　芳賀輪遺跡第12号土壙と芳賀輪遺跡内における小竪穴の在り方

芳賀輪遺跡から検出されている縄文時代の遺構は住居址26軒・土壙67基で加曽利ＥⅡ式期～ＥⅢ式を中心としており、第12号土壙は昭和52年度に行なわれた第４次発掘調査において検出されたものである。第４次発掘調査区は遺跡の南側の縄文時代の集落を南北に貫く幅員６ｍ、全長120ｍのトレンチ状をなし、700㎡の調査区から加曽利ＥⅡ式期～ＥⅢ式期の住居址９軒・土壙30基が検出された他、平安時代の住居址５軒が検出されている（青沼　1984）。土壙は大部分が径 1.5ｍ～ 2.0ｍの円形を呈する小竪穴で、このうち19基の底面からピットが検出されている。現在整理途上であり、遺構配置図が公表されているに過ぎないが、これと隣接して行なわれた昭和61年度の発掘調査では幅員 3.5ｍ、全長160ｍの調査区から加曽利ＥⅡ式期～ＥⅣ式期の住居址４基・土壙12基が検出されており、昨年度に報告書が刊行されている（田中　1988）。小竪穴は６基検出され、うち５基の底面からピットが検出されている。

第12号土壙は第４次発掘調査区の中央部に位置し、第11号土壙と切り合う。規模は径 2.60ｍ・深さ 0.55ｍの円筒形を呈し、中央に径30㎝・深さ60㎝の柱穴と思われる小ピットを有し、壁際に径60㎝・深さ50㎝のピットを３個有する。北東側にローム造り出しの階段状部分を設けており、その両側にやはり柱穴と思われる径20～30㎝・深さ30㎝の小ピット２個を配している。これと切り合う第11号土壙には中央の小ピットの他に、壁際に径50㎝・深さ50㎝のピットが４個みられるが、このうち２個は人為的な貼り床状の埋土が認められる。出土遺物は第２図に示したが、１～２が第11号土壙・３～６が第12号土壙からの出土で、いずれも加曽利ＥⅡ式後半か



1. 芳賀輪遺跡	6. 蕨立貝塚	11. 海老ケ作貝塚	16. 餅ケ崎遺跡
2. 中山遺跡	7. 南二重堀遺跡	12. 高根木戸貝塚	17. 江原台遺跡
3. 荒屋敷貝塚	8. 有吉貝塚	13. 僧御堂遺跡	18. 宮ノ台遺跡
4. 加曽利貝塚	9. 草刈遺跡	14. 城の腰遺跡	
5. 京願台遺跡	10. 下鈴野遺跡	15. 月の木貝塚	

第１図　千葉市周辺の底面施設を有する小竪穴検出遺跡と関連遺跡

らＥⅢ式前半の土器として捉えられるが、覆土中位からの出土で土壙の直接的な時期決定の資料とはならない。既に公表された資料では、第117号土壙が床面直上層より出土した遺物により加曽利ＥⅡ式期後半の時期が与えられる他は、小竪穴のいずれも遺物の出土が覆土上位で明確な時期決定はできない。第４次発掘調査区では、第９号土壙と第37号土壙を切ってそれぞれ第26号住居址と第27号住居址が構築されており、両住居址は共にその炉体土器より加曽利ＥⅡ式期後半からＥⅢ式期前半のものとされ、また第35号土壙は第26号住居址を切って構築している。以上のように小竪穴は住居址に前後して構築されているが、その出土遺物から加曽利ＥⅡ式期後半からＥⅢ式期前半の住居址と並行する時期が考えられる。

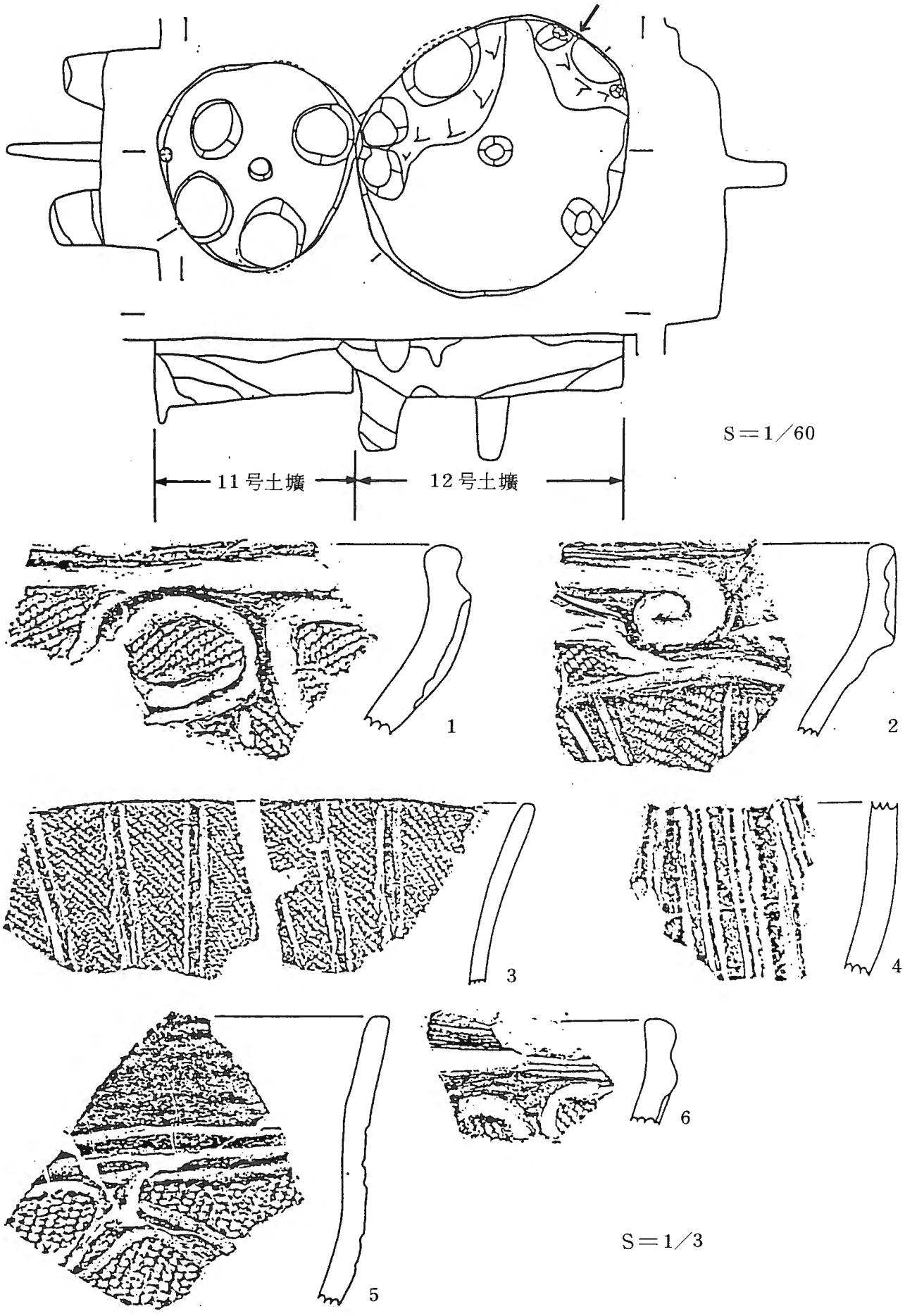
次に芳賀輪遺跡における小竪穴の在り方をみると、第11号土壙、第12号土壙のように底面にピットを有するものは第４次発掘調査区および昭和62年度発掘調査区に限られており、第59号住居址、第60号住居址を中心とした内陸部では付属施設を有する小竪穴は全くみられず、小竪穴の検出例も少ない。芳賀輪遺跡は全域の約15～20％を調査したに過ぎず、また未整理・未報告部分もかなり含んでいるため詳しくは捉え切れないが、このような小竪穴群を中心とする南側の地点とこれを伴なわない内陸部の地点では遺構間の重複関係等からも集落の性格が異なると思われる。

2.　小竪穴の構造と機能

芳賀輪遺跡から検出されている貯蔵穴と思われる小竪穴はすべて円筒状を呈するもので（註１）、いわゆる「フラスコ状」をなすものは検出されていない（註２）。底面付属施設を中心に分類すれば、Ａ類－底面に付属施設を持たないもの。Ｂ類－底面中央に小ピットのみ有するもの。Ｃ類－底面中央の小ピットを欠くが壁際にいわゆる「子ピット」を有するもの。Ｄ類－底面中央の小ピットおよび壁際の「子ピット」を有するもの、に分類される。現在報告されている例では、Ａ類－第１号・第６号・第50号・第56号・第113号、Ｂ類－第120号、Ｃ類－第118号、Ｄ類－第４号・第117号の各土壙で、第116号・第119号土壙は未調査部を残しているがＣ類かＤ類に含まれ、今回紹介する第11号・第12号土壙はＤ類に含まれる（註３）。

底面に小ピットを有する小竪穴については長崎元広氏によって上屋構造が推定されており（長崎　1974）、Ｂ類・Ｃ類は底面中央の小ピットを柱穴とする円錐主柱型で、本来は土壙周辺にタルキ穴が検出されるはずであるが浅いために発見されにくいとされている（註４）。この構造を良く示すものとして、やはり鹿島川流域の中山遺跡 056号・ 057号小竪穴が掲げられ（渋谷　1987）、また村田川流域の草刈遺跡475号址では中央小ピットから１本柱の上屋構造を示すと思われる炭化物が検出されている（註５　高田1986）。

底面壁際のピットは北関東を中心に分布するフラスコ状土壙にも類例が求められ、栃木県梨木平遺跡の調査担当者である海老原郁雄氏により「子ピット」と命名され（海老原　1975）、



第２図　芳賀輪遺跡第11号・第12号土壙

その機能を「変質しやすい物質を納入する『特別室』ではないか」と推定され、鈴木実氏は茨城県赤松遺跡159号土壙の壁際に浅い掘り込みがピットに周る例をとり「ピットに『蓋』をし何らかの貯蔵を行ったもの」（鈴木 1985）としている。また前述した中山遺跡057小竪穴では加曽利EⅢ式土器が埋設してあった。いずれにしてもこの壁際の「子ピット」は貯蔵施設として考えられ、底面中央の柱穴状の小ピットとは機能を別にして考えなければならない。なお階段状の遺構を有する小竪穴としては前期後半に位置付けられる長野県上野遺跡（永峯1957）があげられる（註6）。

以上のように今回紹介した第11号・第12号土壙のようなB類・C類の小竪穴は1本柱の上屋構造を持つ貯蔵穴と思われ（註7）、C類も何らかの上屋構造を持っていたと思われる(註8)。芳賀輪遺跡におけるB類～D類の小竪穴は後に述べる第82号土壙の1例を除きいずれも加曽利EⅡ式期後半からEⅢ式期前半のものと考えられる。

3. 鹿島川流域における小竪穴の変遷

芳賀輪遺跡が位置する鹿島川流域の小竪穴については、遺跡の存り方も含めて以前に触れたことがある（田中 1988）。ここでは未発表資料も加えてみていきたい。鹿島川中流域で発掘調査が行なわれている中・後期の遺跡は、中期前半の迎山遺跡、中期後半の中山遺跡、中期後半から後期前半の芳賀輪遺跡・僧御堂遺跡で、隣接した都川中流域に位置する駒込遺跡・宮ノ台遺跡を加えてもその数は少ない。現在最も古い小竪穴としては芳賀輪遺跡第82号土壙があげられ、発掘時の所見では中峠式期から加曽利EⅠ式期のものと思われる。径約2m・深さ30cmの断面皿状のもので中心に柱穴を有し、先の分類でB類としたものである。このような形態を有するものは、加曽利南貝塚東傾斜面のJ・D－15住居址（後藤 1981）のように阿玉台式期の住居址についても共通したものが認められ、高根木戸S 028・S 041（岡崎 1981）のような阿玉台式期に後続するものと考えられる。

次の加曽利EⅡ式期から加曽利EⅢ式期前半の時期のものには中山遺跡・芳賀輪遺跡が位置付けられ、いずれも今回紹介したような底面に付属施設を有する土壙群により特徴付けられる。中山遺跡は鹿島川の支流の小名木川流域に位置し、加曽利EⅡ式期後半の住居址13軒が径40mの環状に分布し、その内側に小竪穴約10基がみられる。小竪穴はA類2基・B類2基・D類4基で、うちB類1基・D類2基の外周部に小ピットが巡り、057小竪穴の壁際ピットに加曽利EⅢ式器土器が埋設した状態で検出されている。芳賀輪遺跡については前述したが、中山遺跡においては芳賀輪遺跡第56号土壙に代表されるような底面に付属施設を持たないA類のような小竪穴は少ない。

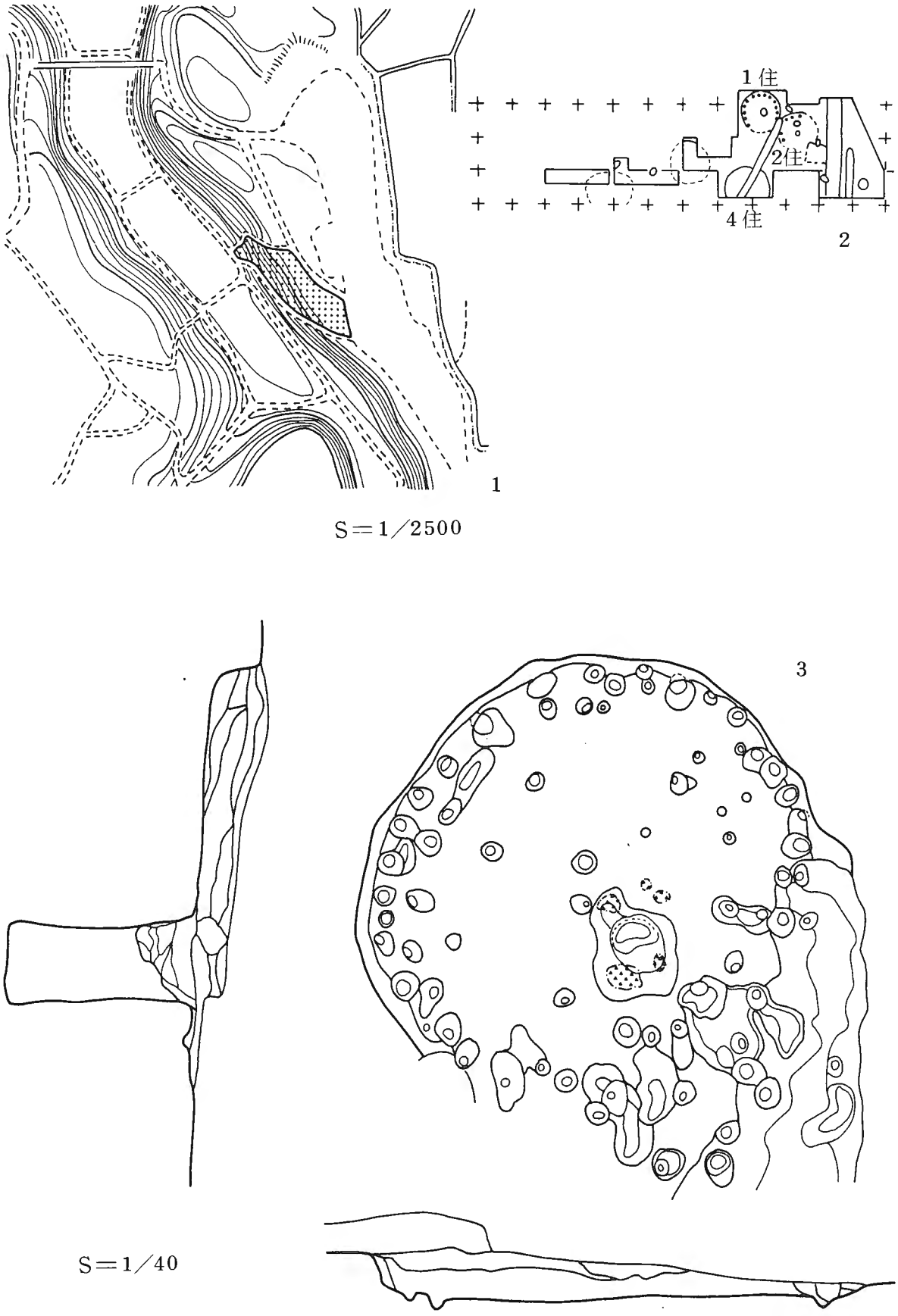
僧御堂遺跡（斉木 1976）は芳賀輪遺跡の東方3kmに位置し、加曽利EⅢ式期から堀之内Ⅰ式期の住居址14軒が検出され、土壙とされているものは51基であるが出土遺物から時期決定が

可能なものは加曽利EⅣ式期5基・称名寺式期6基である。ここでは、円筒形のA類が主体を占め芳賀輪遺跡・中山遺跡でみられた底面に付属施設を有するものはなく、その規模も径1.0m前後と小さくなる。土壙内からの一括出土遺物が多くみられ、第7号・第9号・第16号・第20号土壙からは骨粉が出土しており墓壙に転用されたと思われる（註9）。小川和博氏の分析によれば、住居址は加曽利EⅢ式期6軒・EⅣ式期4軒・称名寺式期1軒・堀之内Ⅰ式期2軒・不明1軒として「（加曽利）EⅢ式期では、ほとんど土壙を伴なわずに、北に開口する馬蹄形に近い集落を形成する。次のEⅣ式期でも馬蹄形は変わらないが、開口部をふさぐように土壙が集中している。称名寺Ⅰ式期では1軒のみでありながら、やはり馬蹄形の軌を同じくする位置にある。土壙群は住居址に接するように西へ移動してくる。また堀之内Ⅰ式期の住居址は馬蹄形の内側へ寄ってくる。」（小川 1980）としているが、むしろ加曽利EⅣ式期では土壙が住居址に近接しているのに対して、称名寺式期では1軒の住居址から離れて土壙が存在し南北に分立する傾向が認められる。遺構が分布する中心部には焼土と土器集中区が認められ、また第8号住居址覆土内と第6号土壙周辺からは貝ブロックが検出されている。

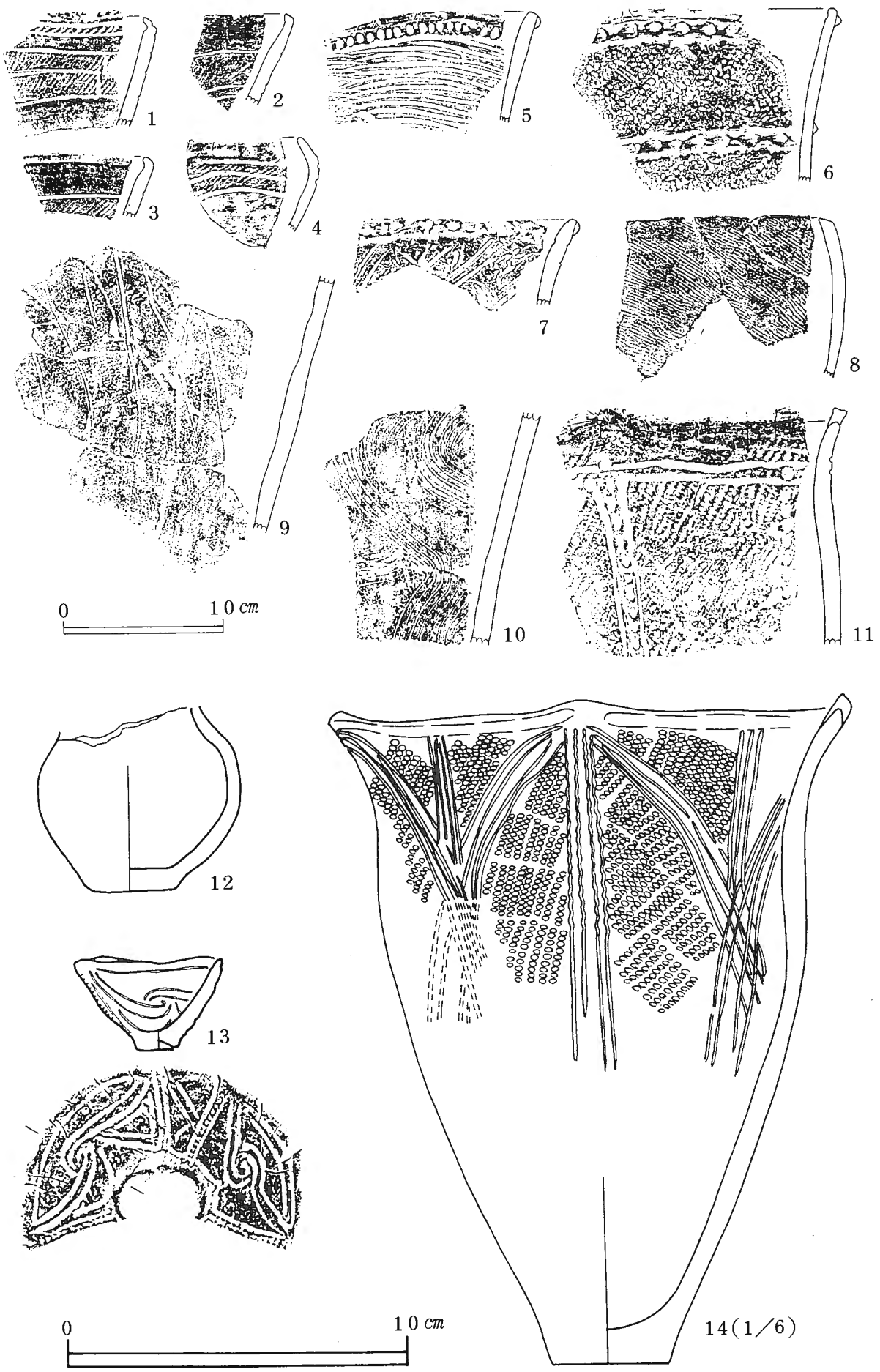
堀之内式期の遺跡としては都川の支谷最奥部に位置する宮ノ台遺跡があげられる（註10・千葉県 1985）。昭和58年の発掘調査により、斜面部345㎡の調査面積に対して堀之内Ⅰ式期2軒・加曽利B式期2軒の住居址が調査され、他に後期の住居址2軒が確認されている。第1号住居址は堀之内Ⅰ式期のもので、入口施設を有し拡張を伴ない、覆土内にはハマグリを主体としてシオフキ・アサリ・アカニシ等により構成された獣骨（イノシシ・シカ）を伴なう加曽利BⅡ式期の投棄貝層が検出されている。小竪穴は第1号住居址の炉址の下から検出され、径0.9m・深さ2.1mを測り覆土内にはハマグリを主体とした堀之内Ⅰ式期の混貝土層が形成されていた（註11）（第3図〜第6図）。

以上のように鹿島川流域での小竪穴は、底面中央に柱穴状の小ピットを有する浅いB類→中山遺跡・芳賀輪遺跡に代表されるC類・D類→僧御堂遺跡のA類→宮ノ台遺跡の口径が小さく深いA類という変遷が辿れ、中期前半に一般的にみられるフラスコ状土壙は現在検出されていない。

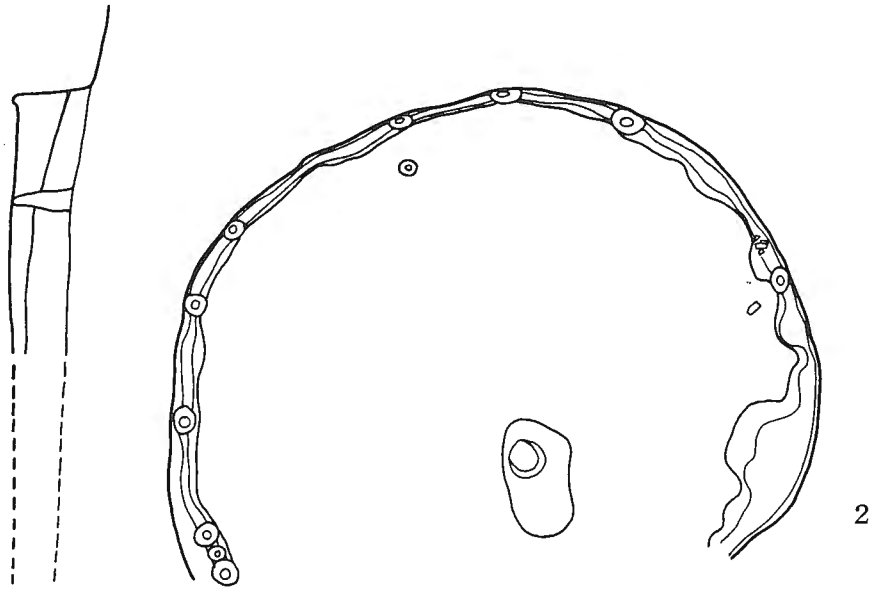
次いで隣接する都川流域の小竪穴を底部にピットを有するものを中心にみていきたい。都川流域は古くから貝塚研究の中心をなしてきた地域であるが、その具体的資料が公表されている遺跡は意外と少ない。底面にピットを有する小竪穴が検出されているのは荒屋敷貝塚（斉木 1978）・加曽利貝塚（武田 1967・杉原 1976・1977・滝口 1977・後藤 1981）・京願台遺跡（山口 1986）・蕨立遺跡（千葉市 1976・岡崎 1982）等である。阿玉台式期の小竪穴が纏まって検出されているのは城の腰遺跡（野村 1979）で、そのほとんどがフラスコ状土壙で底面にピットはみられない。蕨立遺跡は阿玉台式期から加曽利EⅠ式期の遺跡で過去数度に亘る調査により住居址約50軒・土壙約30基が検出されている。このうち底面にピットを有する小竪穴



第３図　宮ノ台遺跡(1)　1.遺跡位置、2.発掘区、3.第１号住居址

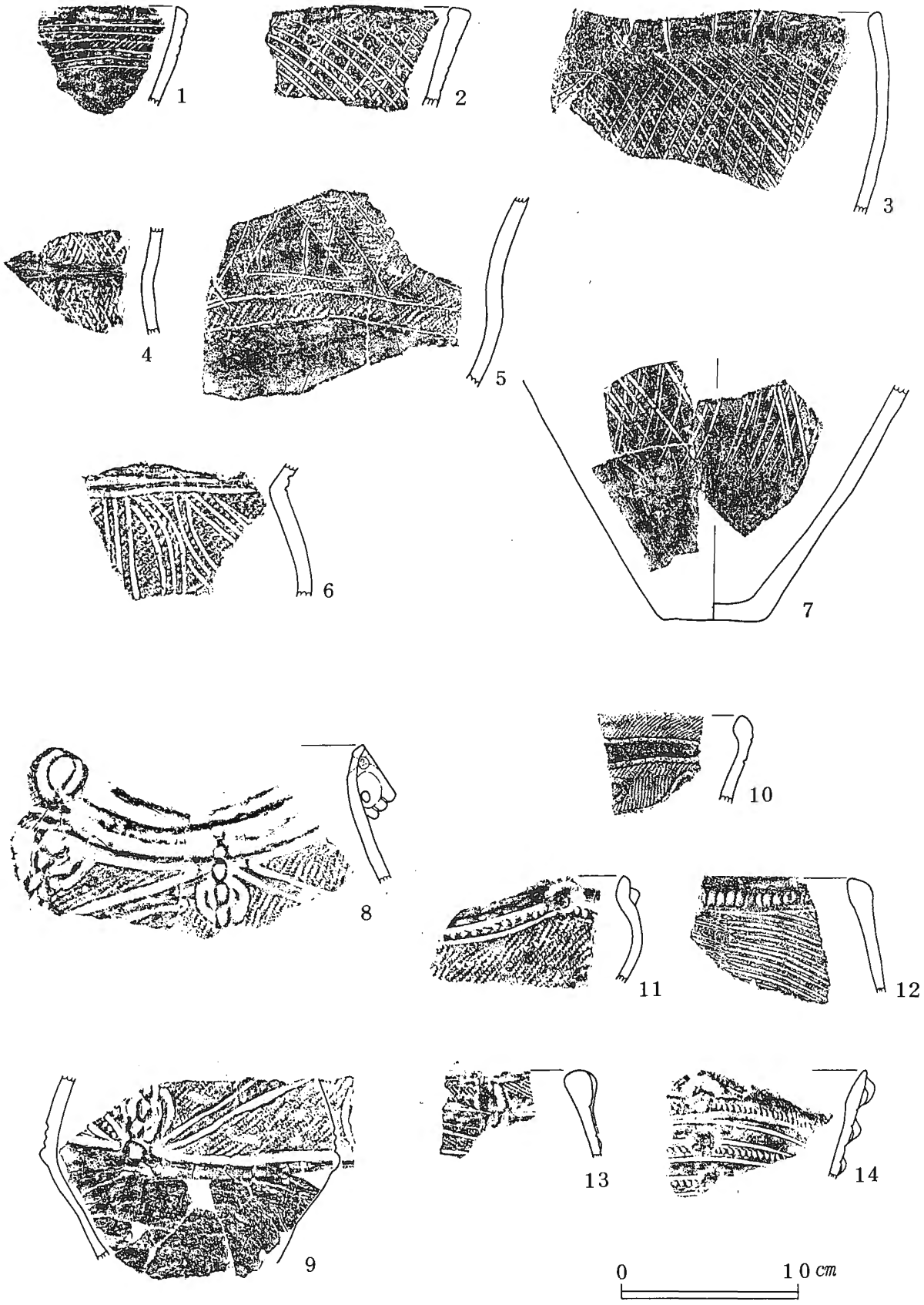


第４図　宮ノ台遺跡(2)　第１号住居址出土遺物
（１～７貝層、12～14床直出土）



S＝1／40

第５図　宮ノ台遺跡(3)　1.第２号住居址　2.第４号住居址



第６図　宮ノ台遺跡(4)　１～７・第２号住居址出土遺物　８～12・第４号住居址出土遺物

は、昭和40年調査の第28号～第31号土壙と昭和51年調査の第15号・第16号土壙である。第28号土壙～第31号土壙はいずれもフラスコ状土壙で、A類の第28号土壙からは甕棺が、C類の第29号・30号土壙から人骨が検出されており、いずれも加曽利EⅠ式期に比定される。第15号・第21号土壙は円筒形を呈するC類で阿玉台式期の後半に比定され、円筒形で底面に子ピットを有する最も古い例とみられる。荒屋敷貝塚からは昭和52年の調査により貝層の内側から78基の小竪穴が群在して検出されており、袋状のものが15基・円筒状のものが46基である。土壙の時期決定をなし得る遺物は少なく袋状のものは阿玉台式期から加曽利EⅡ式期までみられるが、時期が新しくなるにつれて袋状から円筒状に変化し、底面にピットを有するものが多くなる。なお020号の底面からは埋甕が検出されており、043号、060号からは人骨が検出されている（註12）。

次に加曽利貝塚と京願台遺跡についてみていきたい。加曽利貝塚で検出された住居址は前期2軒・中期の阿玉台式期18軒・中峠式期6軒・加曽利E式期50軒、後期の称名寺式期2軒・堀ノ内式期21軒、後期後半から晩期前半15軒（註13）で小竪穴は100基である。小竪穴の分布は北貝塚周辺と東傾斜面に多く、南貝塚周辺については未だ不明であり、北貝塚では貝層下の住居址群に隣接している地点と、住居址群から離れた貝層内側の両地点より検出されている。ここで問題となるのは昭和37年に検出されたA′ピットとE′ピットで、どちらも堀之内Ⅰ式期に比定されている。A′ピットの壁際には子ピットがみられ、この子ピットからは炭化物層が、底面からは鹿角製大型釣針と10数本の魚骨が出土しており、子ピットが貯蔵に使用された1例と思われる。E′ピットは底面中央に柱穴状ピットを有する袋状土壙が想定されている。後述するように、千葉県内では後期では底面にピットを有する例は少なく、これらの例が後期前半まで存続することを示している。加曽利貝塚では底面にピットを有する小竪穴は北貝塚とその周辺に限られており、東傾斜面では底面の中央に小ピットを有するもの以外は少ない。中期の遺構は北貝塚の外縁である南貝塚および東傾斜にも広く分布しており、今後やはり同時期のものと思われる加曽利西貝塚（註14）、京願台遺跡との関係も含めて改めて検討されなければならない。

京願台遺跡は加曽利北貝塚の北方約30ｍに位置し、加曽利EⅡ式期の住居址4軒と小竪穴20基が検出されており、そのほとんどが「フラスコ状」を呈する。底面に子ピットを有するものは5基で、フラスコ状土壙の底面に子ピットを有するものが加曽利EⅡ式期まで残存することを示している。これらの小竪穴は台地縁辺部に分散しており、住居址群の内側に群在するという他の遺跡とは異なった在り方を示している。

4. 千葉県を中心とした小竪穴の在り方

芳賀輪遺跡で検出された底面に付属施設を有する小竪穴を鹿島川と都川流域を中心にみてきたが、このような小竪穴は決して特殊なものではなく、大型集落に付随して一般的にみられる。

その例としては松戸市子和清水貝塚（松戸市 1976）・船橋市高根木戸遺跡（岡崎 1971）・海老ケ作貝塚（岡崎 1972）・市原市草刈遺跡（高田 1986）・佐原市磯花遺跡（岡崎 1984）等があげられる。これらは子和清水貝塚のように住居址群の内側部分に群在して検出されたり（註15）、高根木戸遺跡のように住居址群の内側の他に、住居址と離れた地点に集中する地点を有するものがみられる（註16）。また、これらとは別に小規模な集落に付随する例としては、千葉市南二重堀遺跡（古内 1983）・市原市下鈴野遺跡（大村 1987）等があげられる。下鈴野遺跡では加曽利EⅠ式・EⅡ式期の住居址各1軒に対して、加曽利EⅡ式期～EⅢ式期のB類が2基・D類が1基の計3基の小竪穴が検出され、南二重堀遺跡では加曽利EⅡ式期の住居址7軒に対して、C類2基・D類2基の計4基が検出されている。特に南二重堀遺跡は、支谷を狭んで斜面貝塚を伴なう中期の大型集落である有吉北貝塚（上守 1986 千葉県文化財センター）等が存在し周辺の遺跡を含めた検討が必要である（註17）。

以上みてきたように下総台地における小竪穴の変遷は堀越正行氏の指摘の如く「阿玉台期のフラスコ状→加曽利EⅠ期の袋状→加曽利EⅡ期の袋状から円筒状への転換→加曽利EⅢ・称名寺・堀之内Ⅰ期の円筒状」という形態の変遷は大きな流れとして捉えることができる。このような流れの中で底面に付属施設を設ける小竪穴も、フラスコ状・袋状→円筒状への変化が窺え、その時期は荒屋敷貝塚・京願台遺跡にみられるように加曽利EⅡ式期とすることができる。しかし次の加曽利EⅢ式後半にはこのような底面に付属施設を有する小竪穴はほとんどみられなくなり、これと歩調を合せるように子和清水貝塚・高根木戸遺跡・草刈遺跡等の中期の大型集落も終焉を迎える。これらの遺跡に変わって松戸市貝ノ花貝塚・市川市曽谷貝塚・市原市西広貝塚等の後期に大型貝塚を形成する遺跡が開設される他、松戸市金楠台遺跡（沼沢 1974）・大栄町新山台遺跡（岡田 1986）・佐倉市江原台遺跡（堀部 1980）・船橋市中野木新山遺跡（西山 1977）等の加曽利EⅣ式期～称名寺式期の居住期間が短期間な遺跡も多くみられるようになる。両者共に遺跡の全掘例は少なく、住居と小竪穴の関係はまだ不明な点が多い。後者の遺跡にはいずれも径・深さ共に1 m前後の円筒形を呈する小竪穴が多く検出されているものの、底面に付属施設を有する小竪穴は少なくなる（註18）。

このような底面に付属施設を有する小竪穴は茨城県・栃木県においても広くみることができる。茨城県内では今回述べた千葉県北部とほぼ同様の変遷がたどれ（註19）、栃木県ではこのような底面には付属施設を有する小竪穴が盛行するのは加曽利EⅠ式期のフラスコ状土壙の時期である（註20）。

おわりに

芳賀輪遺跡は加曽利EⅡ式期からEⅢ式期前半に急激に拡大し、内陸部まで集落を拡大したのに対して、加曽利EⅢ式後半に急速な縮少化を示す。これに対応するように僧御堂遺跡が開

設される他、芳賀輪遺跡を載せる台地に隣接した台地上に外堀込遺跡等の加曽利E式終末期の短期間居住を示す遺跡が出現する。この後の堀之内Ⅰ式期では芳賀輪遺跡においては小規模な集落の存続が予想されるものの、隣接する台地上に野呂山田貝塚・八反目台貝塚・宮ノ台遺跡等が新たに開設される。特に宮ノ台遺跡第1号土壙内の混貝土層や僧御堂遺跡第8号住居址内の貝ブロックの形成をみると、従来誉田高田貝塚で指摘されているより早い堀之内Ⅰ式期・加曽利EⅢ式期の段階で既に都川下流域との関係を深め貝を採捕していたものと思われる。

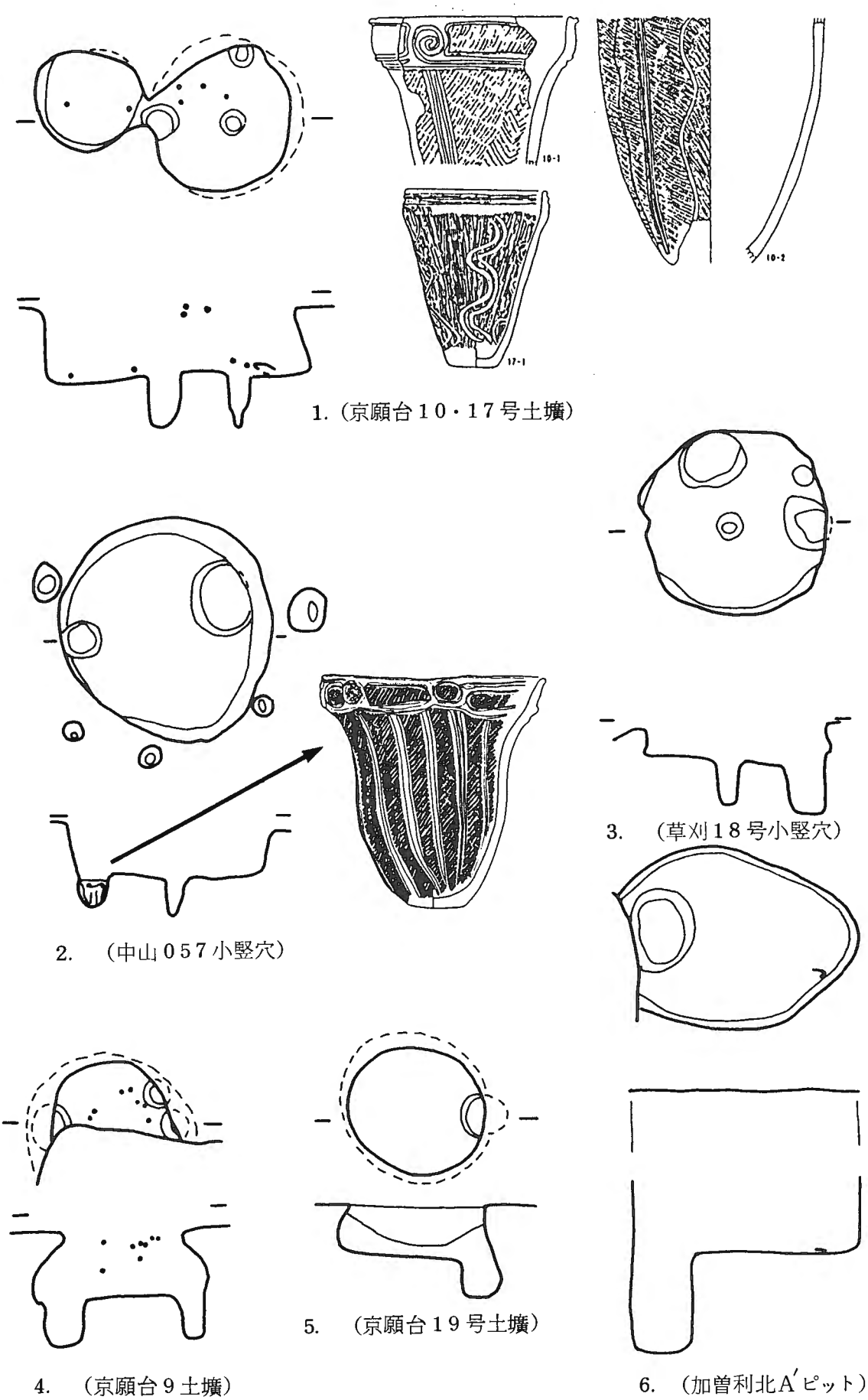
今回みてきたように小竪穴を中心とした芳賀輪遺跡は他の千葉県の中期の大型集落と共通したものを含んでおり、台地縁辺部と内陸部の集落の在り方は加曽利北貝塚と東傾斜面の関係を想起させる。加曽利EⅢ式期から後期の称名寺式期・堀之内Ⅰ式期の集落の動きについてはこれまで多くの論考が加えられている（堀越 1977・小川 1980）。小竪穴については、時期決定が困難であること、機能面において決定的なものがない点等より集落との関係では積極的に論じられていない面が多いが、中期の大型集落の縮小と底面に付属施設を有する小竪穴の消滅とは無関係ではないと思われる。今後は後期にまで視点を延ばしてその要因を追求していきたい。

筆者は学生の頃より芳賀輪遺跡の発掘調査に参加する機会を得、その後本地域を中心とする遺跡の発掘調査を担当する機会にも恵まれてきた。しかし、芳賀輪遺跡はその全体の約20～30％が発掘調査されたに過ぎず、公表されている資料はその一部でしかなく、今回用いた宮ノ台遺跡も未報告のものである。このような状況は芳賀輪遺跡に限らず、都川流域の長谷部貝塚あるいは北部の犢橋貝塚・園生貝塚等の大型貝塚と言われているものさえ、その発掘調査例に比べ公表されている具体的資料は極めて限られており、本地域の集落研究の障害の一因ともなっている。

今日、縄文時代の集落論は新たな段階を迎えており、その方法論の再検討が要求されている（土井 1985・1988・黒尾 1988）中で部分的な発掘調査により芳賀輪遺跡を語ることは大きな危険性を孕んでいる。しかし芳賀輪遺跡の第1次発掘調査から既に13年、今回紹介した第11号・第12号土壙が検出された第4次発掘調査から既に10年を経ている。これまでの一連の「鹿島川中流域の縄文時代の遺跡の研究」も芳賀輪遺跡をどのように捉えるかという問題点から出発したものであった。今後は芳賀輪遺跡の整理・報告を待たなければならないが、その視点は都川下流域を含めて検討していきたい。

今回の発表は永年に亘る芳賀輪遺跡の発掘調査中において、青沼道文氏および久保脇美朗・佐藤順一・横田正美の各氏と検討したものを基としている。芳賀輪遺跡・宮ノ台遺跡の発掘調査および整理では川戸彰氏をはじめとして朝比奈竹男・海老根徹・下津間康夫・本永英司・屋代昭・市川幸恵・米倉初代の各氏および仲田サキさんをはじめとする古泉・野呂地区の人々に多くの御協力を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

（(財)千葉市文化財調査協会）



1.（京願台１０・１７号土壙）

2.　（中山０５７小竪穴）

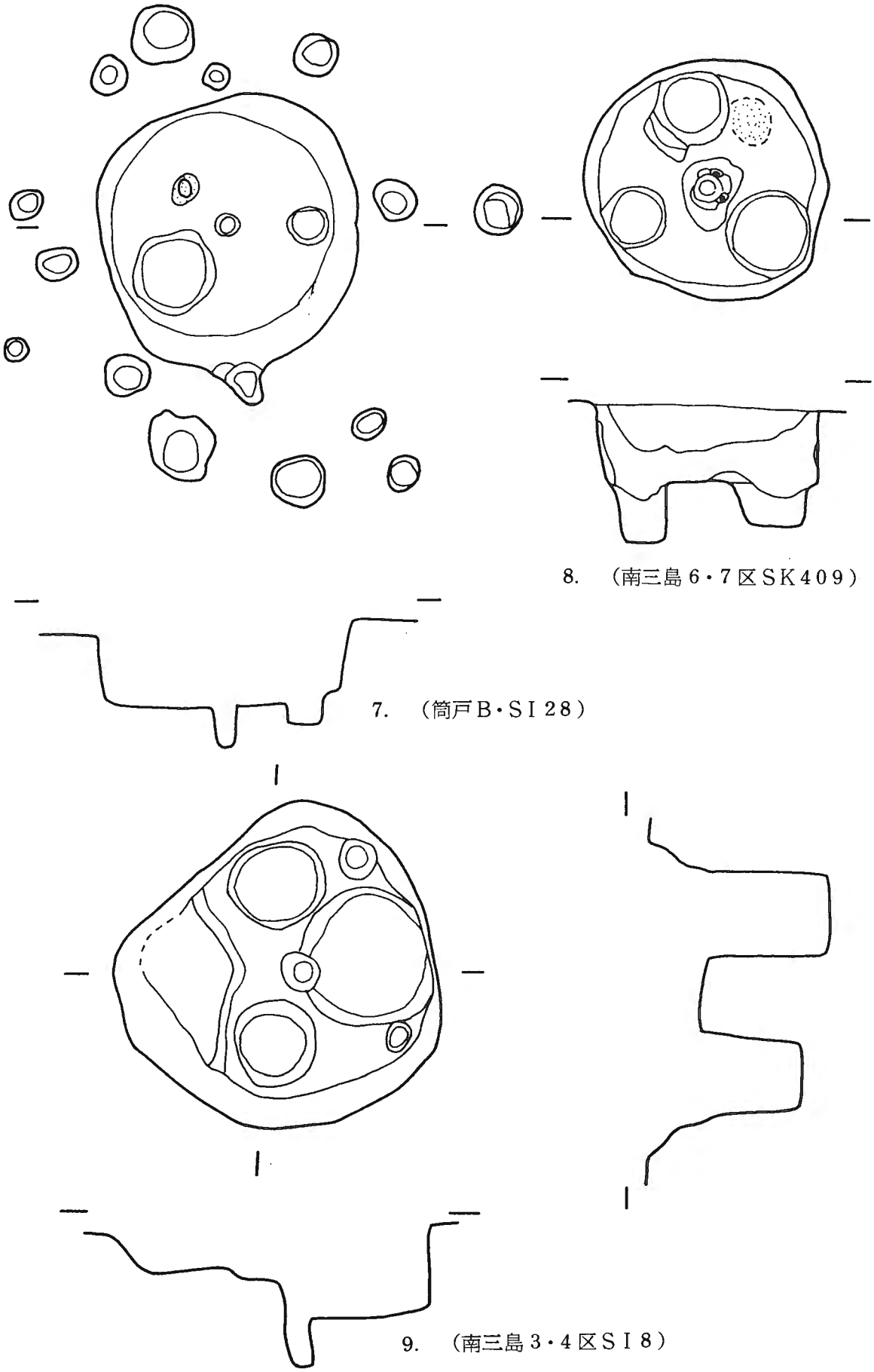
3.　（草刈１８号小竪穴）

4.　（京願台９土壙）

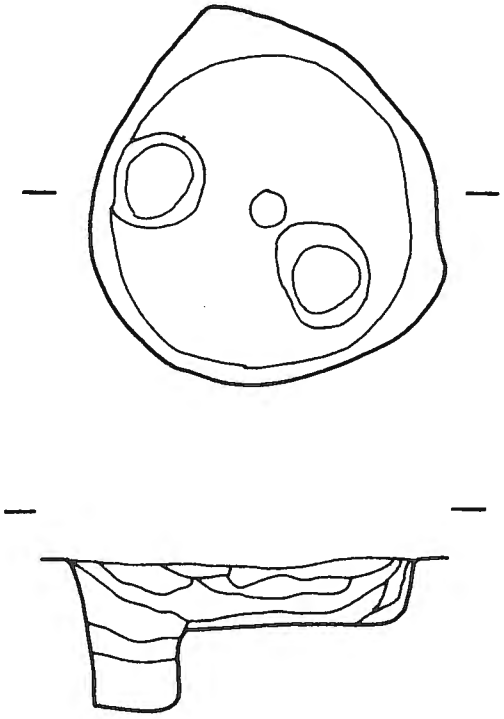
5.　（京願台１９号土壙）

6.　（加曽利北A′ピット）

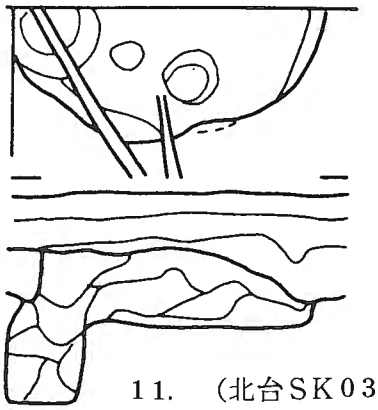
第７図　小竪穴集成図(1)　千葉県



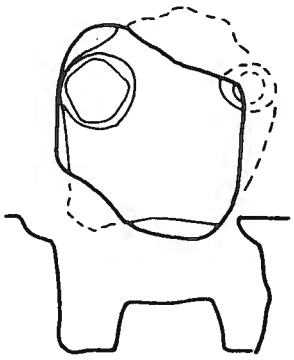
第８図　小竪穴集成図(2)　茨城県



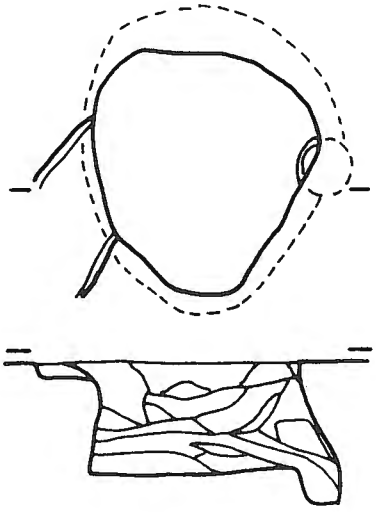
10.　（南三島1・2区ＳＩ98）



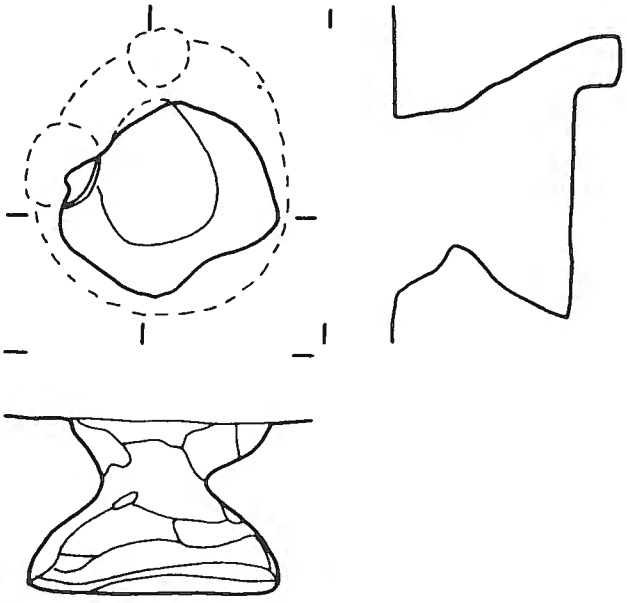
11.　（北台ＳＫ03）



12.　（梨木平Ｐ41）



13.　（上ノ原　ＪＤ-127）



14.　（上ノ原54）

第９図　小竪穴集成図(3)　茨城県・栃木県

〔脚　註〕

1. 小竪穴については堀越正行氏による定義（堀越 1972）が加えられているが、ここでは貯蔵穴と思われる円筒形の土壙を小竪穴とし、所謂「陥穴状」の土壙は除いている。なお今回は堀越氏による一連の研究（堀越 1972・1975・1976・1977）の他に、桐生直彦氏による袋状土坑の研究（桐生 1985・1988）による所が多い。

2. 断面形についての「フラスコ状」と「袋状」および「円筒形」に分けられるが、壁の剥落や遺構検出面等により資料的制約を受けることが指摘されている（桐生 1985・1988）。芳賀輪遺跡でも第119号土壙のように一部袋状を呈するものもみられるが、第12号土壙の施設を入口施設と捉えるならば、構築時より円筒形を呈していたと思われる。

3. A類とした第56号土壙・第113号土壙は覆土が人為的に埋め戻された痕跡があり、大型の一括土器の出土がみられる等、他の土壙とは若干異なった様相が窺え、墓壙への2次転用の可能性も考えられる。また第109号土壙（佐藤 1987）は芳賀輪遺跡では例のない深いもので、後期の可能性が考えられる。

4. 同様な指摘は佐原市磯花遺跡（岡崎 1984）・千葉市有吉貝塚（上守 1986）等においても行なわれており、中央の小ピットを柱穴と捉える報告は多い（後藤 1981）。また中央の小ピットと壁際のピットの機能が異なるとの指摘は前記の他に茨城県（川井 1980）・東京都（桐生 1988）でもなされている。

5. 「中央のピット底より第3層にかけては垂直方向に長さ75㎝に亘り黒色の炭化粒が集中している。木材の痕跡かと考えられ……」（145頁）「土層断面にみられる炭化物よりピット内に埋置させた1本柱の上屋構造を示唆しており特異な存在となろう。」（747頁）（高田 1986）

6. 径2.5㎡、深さ1.4㎡で東南部を長方形に2段に掘り窪めて階段状を作出している。焼土木炭層が検出されており、竪穴の外に付属したと考えられる柱穴状のピット3個がみとめられる。出土遺物から諸磯b式期のものとされている。また茨城県南三島遺跡3・4区の第8号住居跡とされた小竪穴においても、ロームの掘り残しで段状になる部分がみられる（斉藤 1980）。

7. 小竪穴から種子が出土している例として、松戸市子和清水貝塚321号土壙・船橋市高根木戸遺跡第19号小竪穴・第30号小竪穴・海老ケ作貝塚第3号小竪穴等からクルミ・マコモ等が出土しており（小澤 1983）、竜角寺ニュータウン№4地点の第60号土壙からは炭化した木の実が多量に検出されている（柿沼 1982）。このような小竪穴については墓壙として捉える見解（清藤 1977）もあるが、ここではそれらを貯蔵穴の2次使用とする堀越正行氏の説をとる（堀越 1976）。また茨城県筒戸A・B遺跡第28号住居跡とされたもの（桜井 1984）や、南三島遺跡7区第409号土壙（和田 1985）のように、底面にピットと焼土を有する例

があり、「中央のピットにトーテムポール状の祭柱を建て、この近くで火を用いた祭祀的な儀礼をおこなったものと考えられる。」（斉藤 1987）とされている。両者共に遺物の出土量は多く、特に筒戸A・B遺跡第28号住居跡とされているものについては、廃棄後に遺物の投棄が行なわれていることが確認されている。

8. 「このように、小竪穴の上部構造としての上屋が各地で想定されているのである。しかし、ローム層に達しないことも考慮すべきことであるが、同一遺跡でピットを付随する小竪穴と、ピットをもたない小竪穴が併行するという相違は、上屋の堅固的差異もさることながら、上屋存在有無の差異をも反映しているということも考慮しなければならない。」（堀越 1976 16頁）の指摘も重要である。

9. 第16号土壙からは加曽利EⅣ式土器が、第20号土壙からは称名寺式土器が出土している。また第7号土壙と第20号土壙では覆土Ⅰ層下の焼土層から骨紛が検出されており、第7号土壙ではこの焼土面に遺物が集中しているようである（遺物の出土状況の記載がなく、写真図版より推測される）。

10. 武田宗久氏は本遺跡を鹿島川流域としている（武田 1988）が誤りである。本遺跡は都川が北上して西に大きく屈曲する地点から東へ入る支谷の最奥部の泉自然公園内に存在する。台地としては都川と鹿島川の分水嶺をなし、半径1～1.5㎞内に野呂山田貝塚・芳賀輪遺跡・八反目台貝塚・川井道ノ下貝塚等の諸遺跡が存在する。

11. 同じ堀之内Ⅰ式期でも第4号住居址は第1号住居址と形態を大きく異にする。斜面部中段に構築され、周構を廻らすのみで柱穴等は検出されなかった（植木の関係で一部未掘部分を残す）。斜面部に住居址を構築する例は、市原市西広貝塚（米田 1983）・祇園原貝塚（米田 1979）・菊間手永貝塚（市原市文化財センター 1985）等後期前半に多くみられる。なお宮ノ台遺跡からは加曽利EⅢ式から安行Ⅱ式までの土器が出土している。

12. 060号C土壙の底面には厚さ3～5㎝の粘土質土層が中央に敷設され、さらに幅60㎝で断面形に約20㎝の立ち上りがあり、この内側から人骨が検出されている。

13. 堀越正行氏の集計による（堀越 1988）。なおこの他に、昭和61年度の試掘調査により、阿玉台式期1軒・加曽利E式期の住居址5軒・堀之内式期1軒・小竪穴11基が検出されており、これまで加曽利貝塚で欠落するとされていた加曽利EⅣ式期の住居址も1軒検出されている（後藤 1988）。

14. 加曽利西貝塚とは、加曽利北貝塚の西側外縁部に存在する点在貝塚を指す（後藤他 1987）。庄司克氏によれば堀之内Ⅰ式を主体としているとされているが（庄司 1988）、南貝塚西側において昭和53年に行なわれたガス管埋設工事では加曽利EⅡ式～EⅢ式期の住居址が2軒重複して検出されている（うち1軒には貝層を伴なう）。また昭和55年・昭和58年の調査では加曽利E式、加曽利B式土器が検出されている（千葉県 1986・千葉県 1987）。

15. 昭和49年以降の発掘調査により住居址278基・小竪穴1000余基が検出されており、小竪穴の半数以上の底面に付属施設が認められ「概して阿玉台期及び中峠期、加曽利ＥⅠ期には袋状を呈しているが、ＥⅠ期からＥⅡ期には筒形が顕著」となる。清藤一順氏は遺物の出土状態より墓壙として捉え「特に加曽利ＥⅡ式の大型土器を使用した甕棺墓は、居住域の内側に一定の幅を持って環状に区画されていた」（清藤 1977）としている。

16. 昭和42年の発掘調査により住居址73基・小竪穴129基が検出されている。小竪穴は円筒形49基・フラスコ状21基・鍋底状8基等で、S048やS113のようにフラスコ状土壙の底面にピットを有するものもある。出土遺物が少ないために時期的変遷は捉えられないが、子和清水貝塚同様にフラスコ状土壙が阿玉台式期に多く以降円筒形に変遷すると思われるが、芳賀輪遺跡でA類として捉えた柱穴状ピットを有するS028やS041のようなものが阿玉台式期にみられる。なお小竪穴と住居址の関係については丹羽佑一氏が「1類＝住居と場を共有しない群（北部にまとまって分布する）。2類＝住居と場を共有する小竪穴群である。これらの構築過程を検討すると、共に始期Ⅰから始まり、住居群の構築より一時期早い。また、居住空間が外側から内側へ移されるのに対して、小竪穴群1類は当初から居住空間内限の内側に、あらかじめ居住予定空間に設けられ、その内限は居住空間の内限と一致する」（丹羽 1987）とし、また向坂鋼二氏は東北部の小竪穴群を集落の共同使用に、住居址周辺のものはより私的なものとして捉えている（向坂 1977）。

17. 縄文時代中期の住居址130軒・土壙760基が検出されているが、集落は加曽利ＥⅢ式期で終焉しており、同じ村田川下流域の草刈貝塚と共通している。なお村田川下流域の貝塚としては他に西狩ノ原貝塚と僅か3遺跡があげられるのに対して、後期の貝塚は19遺跡と急増することが指摘されており（小池 1983）、これに対して貝塚を伴なわない包含地遺跡が中期の主体を占めている（郷田 1979・1982）。このような変化は後に述べる中期末から後期初頭にみられる遺跡の断絶を強く現わしていると思われるが、中期の大型集落である有吉北貝塚・草刈貝塚において加曽利ＥⅣ式期が欠落しているのは注目されてよい。

18. 中期末の竜角寺ニュータウン遺跡群№4地点第120号土壙（柿沼他 1982）・中台貝塚第32号土壙（宮 1987）や後期初頭の曽谷貝塚D1号小竪穴（堀越 1977）・第18地点P8・P9・P24（花輪 1987）等、加曽利ＥⅣ式期以降にも底面にピットを有する例がみられる。しかし、加曽利北貝塚A′ピットや竜角寺ニュータウン遺跡群№4地点第120号土壙のように「子ピット」に相当する例は少なく、加曽利北貝塚E′ピットや権現原遺跡P20（加藤 1987）のように底面中央に柱穴状の小ピットを有する例が多い。後期の大型集落における小竪穴のあり方は報告例が少なく不明な点が多い。纏まった報告としては千代田遺跡・西広貝塚がある。千代田遺跡第Ⅳ区では、中央部に11基（中期末6基、後期中～末5基）が散在し、北側に110基の小竪穴群（加曽利ＢⅡ～安行Ⅰ式期）が顕著な重複を示しながら検出されている。

形状は必ずしも一律ではないが、遺物の出土状況および覆土の状態から墓壙と考えられる（米内・宮入 1972）。また西広貝塚ＳＳ１区からはやはり約10基の祭祀的色彩の強い小竪穴が検出されている（米田 1983）。これに反して、全面発掘例とされる貝の花貝塚では10基前後検出されているに過ぎない。隣接したＢ地点で整地の際に径１ｍ前後のものがかなりの数観察されており、馬蹄形貝塚の外側に土壙群が拡がる可能性が示唆されている（関根 1973）。

19. 茨城県では東大橋原遺跡（川崎 1979）・下広岡遺跡（加藤 1981）・赤松遺跡（川井 1980）・北台遺跡（岩松 1988）等から、底面にピットを有するフラスコ状土壙が検出されており、瓦吹堅氏による中期の遺跡集成によってもその数はかなりの量となる（瓦吹1986・1987・1988）。下広岡遺跡の分析によれば、フラスコ状土壙では底面に無ピットのものが阿玉台式期を中心とするのに対して、底面にピットを有するものは加曽利ＥⅠ式期を中心とするとされており、円筒形の土壙はフラスコ状土壙に若干遅れることが指摘されている。底面にピットを有する円筒形の土壙としては、大谷津Ａ遺跡第105号・155号土壙（鈴木 1985）・大谷津Ｂ遺跡466号土壙の他に前記した南三島遺跡１・２区第70・98・141号住居跡・第３区第８号住居跡・第７区409号土壙、筒戸Ａ・Ｂ遺跡第28号住居跡等があげられ、君ケ台遺跡例（川崎 1980）を含めてもいずれも加曽利ＥⅢ式期で以後ほとんどみられなくなる。

20. 栃木県では梨木平遺跡・台耕上遺跡・鹿島神社裏遺跡（以上栃木県 1976・1979）・上ノ原遺跡（青木 1981）・御城田遺跡（芹澤 1987）等において底面にピットを有するフラスコ状土壙が検出されており、加曽利ＥⅠ式期を中心としている（岩上 1981）。

＜参考文献＞

青木健二　1981『栃木県高根沢町上の原遺跡』日本窯業史研究所

青沼道文他　1976「千葉市芳賀輪遺跡－第１次調査概報－」『千葉市文化財報告第１集』

1977『千葉市芳賀輪遺跡－第３次発掘調査概報－』千葉市教育委員会

1984『千葉市芳賀輪遺跡－第２・７次発掘調査概報－』千葉市教育委員会

市原市文化財センター　1985『市原市文化財センター昭和57・58年度』

茨城県考古学協会　1980「シンポジウム　茨城県の中期縄文文化－袋状土壙を中心に－」『第４回茨城県考古学研究発表会要旨』

岩上照朗・屋代方子　1981「栃木県における袋状ピットについて」『北関東を中心とする縄文中期の諸問題』日本考古学協会昭和56年度資料

岩松和光　1988『北台遺跡発掘調査報告書』鹿島町木滝国神遺跡調査団

上守秀明　1986「遺構内堆積貝塚のもつ意味について－有吉北貝塚の一事例について－」『研究連絡誌』第15・16号　千葉県文化財センター

海老原郁雄　1975「梨木平遺跡第４次調査報告書」『上河内村文化財調査報告書第３集』

大村　直　　1987『下鈴野遺跡』　市原市文化財センター
岡崎文喜他　1971『高根木戸』　船橋市教育委員会
1972『海老ケ作貝塚』船橋市教育委員会
1982『遺跡研究論集Ⅱ－蕨立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落址の研究－』
1984『磯花遺跡Ⅲ』
岡田光広他　1984「新山台遺跡（№15）」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－大栄地区（Ⅰ）－』　千葉県文化財センター
小川和博　1980「千葉県における縄文中期末の居住形態」『大野政治先生古稀記念房総史論集』
小澤清男　1983「房総半島における縄文時代遺跡出土の植物種子をめぐって」『貝塚博物館紀要』第９号　千葉市加曽利貝塚博物館
柿沼修平他　1982『竜角寺ニュータウン遺跡群』　竜角寺ニュータウン遺跡調査会
加藤晋平・花輪　宏　1987『堀之内』　市川市教育委員会
加藤雅美他　1981「下松遺跡」『常盤自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』　茨城県教育財団
川井正一　1980「赤松遺跡」『竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書４』　茨城県教育財団
川崎純徳他　1979『東大橋遺跡－第２次調査報告書－』　石岡市教育委員会
1985『茨城県史－原始古代編－』
川崎純徳・鴨志田篤二　1980『君ケ台貝塚の研究』　勝田文化研究会
瓦吹　堅　1986・1987・1988「茨城県縄文中期集落の変遷(1)・(2)・(3)」『茨城県立歴史館報』13・14・15
桐生直彦　1985「東京都における縄文時代の袋状土坑」『東京考古』第３号
1988「新・東京都における縄文時代の袋状土坑」『東京考古』第６号
黒尾和久　1988「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』№454
小池裕子　1983「貝類分析」『縄文文化の研究２　生業』
郷田良一　1979『東南部ニュータウン７－木戸作遺跡（第２次）－』　千葉県文化財センター
1982『東南部ニュータウン10－小金沢貝塚－』　千葉県文化財センター
後藤和民・庄司　克他　1981「昭和45・46年度加曽利貝塚東傾斜面遺跡限界確認調査」『貝塚博物館紀要』第６号　千葉市加曽利貝塚博物館
1981「昭和47年度加曽利南貝塚南側平担部第４次遺跡限界確認調査概報」『貝塚博物館紀要』第７号　千葉市加曽利貝塚博物館
1982「昭和48年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』第８

号　千葉市加曽利貝塚博物館
1987『史跡加曽利南貝塚予備調査概要』　千葉市教育委員会
佐藤順一　1987『千葉市芳賀輪遺跡・太田アラク遺跡』　千葉市文化財調査協会
斉木　勝他　1977『千葉市中野僧御堂遺跡』　千葉県文化財センター
1978『千葉市荒屋敷貝塚－貝塚中央部発掘調査報告－』　千葉県文化財センター
斉藤弘道　1987「南三島遺跡３・４区」『竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16』茨城県教育財団
桜井二郎他　1984「筒戸Ａ遺跡・筒戸Ｂ遺跡」『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書２』　茨城県教育財団
渋谷　貢他　1987「中山遺跡」『四街道市四街道南土地区画整理事業地内発掘調査報告書』
庄司　克　1988「加曽利貝塚発掘の成果」『加曽利貝塚と日本の考古学』　加曽利貝塚保存25周年記念講演会資料
杉原荘介　1976『加曽利南貝塚』
1978『加曽利北貝塚』
鈴木　実　1985「縄文時代の袋状土坑－槻沢遺跡の事例を中心として－」『西那須野町郷土資料館紀要』第２号
鈴木義治他　1985「大谷津Ａ遺跡」『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書３』　茨城県教育財団
清藤一順　1977「縄文時代集落の成立と展開」『研究紀要』2　千葉県文化財センター
関根孝夫他　1973『貝の花貝塚』　松戸市教育委員会
芹澤清八　1987『御城田』　栃木県文化振興事業団
高田　博他　1987「草刈遺跡（Ｂ区）」『千原台ニュータウンⅢ』　千葉県文化財センター
高橋康男　1985『千葉県市原市草刈遺跡』　市原市文化財センター
滝口　宏　1977『加曽利貝塚Ⅳ』
武田宗久　1967『加曽利貝塚Ⅰ－昭和37年度加曽利北貝塚調査報告－』
1988「縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進・海退(1)」『千葉市立加曽利貝塚博物館開館20周年記念特別講座講演集』
田中英世他　1988『千葉市芳賀輪遺跡－昭和61年度発掘調査報告書－』　千葉市文化財調査協会
千葉県教育庁文化課　1985『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－昭和58年度－』
千葉県文化財センター　1985・1987「縄文時代(1)・(2)」『房総考古学ライブラリー２・３』
1986『千葉県文化財センター年報12』
千葉市　1976『千葉市史　史料編Ⅰ－原始・古代・中世－』

土井義夫　1985「縄文集落の原則的問題－集落遺跡の二つのあり方について－」『東京考古』3
1988「考古資料の性格と転換期の考古学」『歴史評論』№454
栃木県　1976・1979『栃木県史資料編　考古1・考古2』
長崎元広他　1974『扇平遺跡』　岡谷市教育委員会
1980「縄文集落研究の系譜と展望」『駿台史学』第50号
1988「縄文時代集落論の系譜」『考古学ジャーナル』№293
永峯光一他　1957「上原」　長野県教育委員会
西山博孝他　1977『中野木新山遺跡』　中野木新山遺跡調査団
丹羽佑一　1978「縄文時代中期における集落の空間構成と集団の諸関係」『史林』第61巻2号
沼沢　豊　1974『松戸市金楠台遺跡』　千葉県文化財センター
野村幸希他　1979『千葉市城の腰遺跡』　千葉県文化財センター
花輪　宏・斉藤忠昭　1987「曽谷貝塚」『市川市東部遺跡群発掘調査報告－昭和61年度－』市川市教育委員会
古内茂・伊藤智樹他　1983『南二重堀遺跡』　千葉県文化財センター
堀越正行　1972「縄文時代の集落と共同組織－東京湾沿岸地域を例として－」『駿台史学』第31号
1975・1976・1977「小竪穴考(一)・(二)・(三)・(四)」『史館』第5・6・8・9号
1977「姥山と今島田、その歴史的背景」『MUSEUM　ちば』第8号
1977『曽谷貝塚D地点発掘調査概報』　市川市教育委員会
1986「京葉における縄文中期埋葬の検討」『史館』第19号
1988「加曽利貝塚と縄文時代の生活」『加曽利貝塚と日本の考古学』　加曽利貝塚保存25周年記念講演会資料
松戸市教育委員会　1976『子和清水貝塚　遺構図版編1・2』
宮　重行　1987「中台貝塚」『主要地方道成田松尾線V』　千葉県文化財センター
向坂鋼二　1979「原始集落の形と特徴」『日本考古学を学ぶ(3)－原始・古代の社会－』
山口典子　1986「京願台遺跡」『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書』千葉県文化財センター
米田耕之助　1979「祇園原貝塚」『上総国分寺台発掘調査概要VI』　市原市教育委員会
米田耕之助　1983「西広貝塚第4次調査」『上総国分寺台発掘調査概報』　市原市教育委員会
1983「西広貝塚出土の安行1式土器」『史館』第14号
和田雄次・斉藤弘道　1985「南三島遺跡6・7区」『竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査

報告書11』　茨城県教育財団

＜追記＞

脱稿後、栄町麻生広ノ台遺跡の発表に接した（昭和63年度千葉県遺跡調査研究発表会）。阿玉台Ⅲ式期～加曽利ＥⅡ式期の住居址約70基・小竪穴700～800基が検出されており、小竪穴はフラスコ状」を呈するものが主体をしめ、底面中央に柱穴状の、壁際に「子ピット」を有するものが多くみられる。小竪穴からは大型土器の出土も多く、その在り方は松戸市子和清水貝塚と類似するようである。

また中期末の遺跡全掘例として千葉市動物公園建設に伴ない発掘調査が行なわれてきた餅ケ崎遺跡があげられるが、資料の一部が報告されているに過ぎない（横田正美　「柄鏡形住居址とその遺物について　千葉市源町・餅ケ崎遺跡」『貝塚博物館紀要』第9号　1983 千葉市加曽利貝塚博物館）、中期末～後期初頭の住居址約80軒・縄文時代の土壙約450基が検出されており、その主体は加曽利ＥⅣ式期である。早い時期での資料の整理・公表が切望される。